



# “社会を明るくする運動”

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

## 10月18日(日)作文コンテスト表彰式を開催しました!



作文コンテスト表彰式(小学生の部)



作文コンテスト表彰式(中学生の部)



### 《“社会を明るくする運動”とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全で安心な明るい地域社会を築こうとする全国的な運動です。

### 《行動目標(この運動が目指すこと)》

- ① 犯罪や非行を防止し、安全で安心して暮らすことのできる明るい地域社会を築くこと
- ② 犯罪や非行をした人が再び犯罪や非行をしないように、その立ち直りを支えること

### “社会を明るくする運動”豊島区推進委員会 (50音順)

警視庁(巣鴨署・池袋署・目白署・巣鴨少年センター)、東京商工会議所豊島支部、東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会、豊島区、豊島区環境衛生協会、豊島区教育委員会、豊島区更生保護女性会、豊島区商店街連合会、豊島区青

少年育成委員会連合会、豊島区町会連合会、豊島区BBS会、豊島区保護観察協会、豊島区保護司会、豊島区民生委員・児童委員協議会、豊島区立小学校PTA連合会、豊島区立中学校PTA連合会

“社会を明るくする運動”豊島区推進委員会では、例年7月の強調月間に、中央大会「区民のつどい」を開催するほか、地区大会として区内12地区の青少年育成委員会を中心に各団体の協力のもと、様々な趣向を凝らしたPR活動を実施しています。

今年は、新型コロナウイルスの影響で多くの行事・催しが中止となりましたが、「いのち」「社会を明るくする運動」をテーマに募集した作文コンテストには、豊島区立の小中学校の児童・生徒の皆さんからたくさんの応募をいただきました。応募作品の中から、優秀作品を紹介します。



## 小学生の部

1,660  
作品受作  
文コン  
テスト  
賞  
品

## 中学生の部

289  
作品★ ★  
推進委員長賞

## 「社会を明るくするために」

さくら小学校  
6年生ひょうどう  
兵藤 あんじゅ  
杏樹さん

社会を明るくするために、私達一人一人が出来る事とは、何でしょうか。

私は、この事について、昨年、とても良い経験をしました。突然ですが、皆さんは、学校に漫画を持って来て良いと思いますか？

ある日、クラスの一人が、学校に漫画を持って来ました。数日すると、漫画を持ってくる子は、1人から2人、5人、6人、と増えてきました。

楽しいストーリーの漫画を持って来る人、怖いイラストが描かれた表紙の漫画を持って来る人等、色々で、中には、その怖い表紙を見るのがいやで、その漫画が置かれている机の前を通りたくない、という人もいました。

そして、漫画を持って来る人数がさらに増えて来た時に、先生は、「みんなで話し合いをしよう。」

と、クラスのみんなに呼びかけました。漫画を持って来たいという意見、持って来てはダメ、と言う意見が出ましたが、その中に、「休み時間の間だけ読む、授業が始まったら読まない、という約束を守る事が出来るのなら、漫画を持って来てもいいのではない。」という意見が出て、みんなも「そうだね。」と言ひ合い、「みんなでこの決まりを守るのなら、持って来て良い事にしよう。」というルールが、決まりました。

しかし、1週間たつと、次第に、ルールを守れない人達が現れ始めました。漫画を読む事が楽し過ぎて、授業中にも読んだり、休み時間が終わる時には漫画をしまう約束だったのに、出したままにしておいたため、他のクラスの人も、漫画を持って来ている事に気が付き始めました。

本当にこれで良かったのかな、と、みんなは、決めた事と、実際みんなの行動が少しずつ違ってきている事、そして、漫画を持って来る事に、違和感を覚え始めました。

私達は、もう一度、話し合いました。この時には、クラス全員が、漫画を学校に持って来ると、授業中にも読みたくなるし、他のクラスの人にも気まずい、と感じていました。

「やっぱり漫画を学校に持つてくるのはやめよう。」

私達は、みんなで最後にそのルールを決めて、次の日から、私達のクラスは、誰も漫画を持って来なくなりました。

クラスは、それぞれ個性を持った人々の集まりであり、様々な考えを持った人がいます。その中で、今の私達に最も良いと思えるルールを考え、みんなで実行することの難しさ、最後の結論にたどり着けた時の、ほっと、心がやわらかくなる感覚を知りました。

私がもう一つ経験したのは、体育の球技の授業でした。偶然にも、強いチームと弱いチームに分かれてしまいました。私がいたチームには、球技を習っている子が多くいたため、どの試合でも勝利する事が出来ましたが、弱いチームは、運動が得意な子が少なく、と中で泣いてしまう子まで出てしまいました。

私は強いチームにいたけれど、球技が苦手だったので、試合中は得点に結びつく行動は何も出来ず、試合に勝っても、なぜか嬉しくありませんでした。負けてしまった弱いチームの人達は、同じ時に、どんな気持ちだったでしょう。

授業が終わってから、負けてしまったチームの一人が、「明日も試合があるから、自分達でルールを作って、楽しく戦おうよ。」とチームメイトに呼びかけ始めました。

「点を取れたら笑顔でハイタッチ!点を取れなくても笑顔。いつでも声をかけ合おう!」

そんな風に、チームの中で励まし合うルールを作っていました。次の日の試合で、彼らはやっぱり負けてしまっていたけれど、ずっと笑顔で、自分達のやれる事をあきらめずにがんばってやり切りハイタッチをしていました。自然災害や感染症など、私達には、これから「こんな時にはどうしたらいいのだろう。」と、とまどい、不安に思う事がたくさん起こるのだと思います。

社会は、個性や考え方の違う人々の集まりであり、自分にとって心地良い環境や方法でも、自分ではない誰かにとっては、違う場合があるのだという事を忘れてはいけません。

一人とは、ひとりぼっちという意味ではなく、「社会の人々の内の一人」であり、「世界中の人々の内の一人」なのです。

私達は、毎日、どんな小さな出来事からも、失敗や成功、次へ活かせる事を多く学んでいます。一人一人の経験、学び、思いやりを集めて、時には立ち止まって考えながら、みんなで、ほっと心地良く過ごせる環境を作る事が、社会を明るくする事につながるのだと思います。

★ ★  
常任委員長賞

## 人の命、牛の命、大切な命

仰高小学校  
6年生いわい  
岩井 まゆ  
まゆさん

東京オリンピックパラリンピック色になるはずだった令和2年。年が明け、2月の終わりになったとき、新型コロナウイルス感染拡大防止のため学校が突然休校になった。

5年生のまともめ終わらないのに学校へ行けなくなった。私たちが自宅学習をしているうちに、6年生は卒業してしまいました。練習を重ねたリコーダー演奏で入学してもらうことも、卒業生と在校生とでお別れの掛け合いをすることもなく、卒業式の日はまだ家にいた。

新学期を迎えた。4月になればと我慢を続けた自宅待機が明け、迎えた待望の新学期だ。ところが感染拡大は止まず、国から緊急事態宣言が出た。最学年としての自覚を持ち、新入生を迎える第一歩の入学式にも出席できず、知らないところで入学式は終わっていた。

始業式では先生と友達と一瞬だけ6年生になった喜びを分かち合い、翌日からまた休みになった。予定では連休明けまでに何日か登校日があり、給食が食べられるはずだったが、その給食は中止になった。献立表だけが残った。毎日の献立には「牛乳」と書いてあった。

人類にとって世界規模で大変なことになっていることは理解したが、正直そのとき一番苦しかったのは牛のことだった。昨年の夏、移動教室で立科へ行った。事前学習で、私の班は牛について調べた。牛の種類、食べ物、病気、牛乳が乳製品に加工されるまでなどを調べ、牛を身近に感じ、命に感謝をする学習ができたと思う。

立科にはたくさんの牛がいた。草をむしって顔に近づけるとムシャムシャと食べた。大きな黒い目とときどきこちらを見ながら草を食べていた。とてもかわいかった。

牛乳は草を食べ、子牛を産み、約300日間、乳を出し、乳を出すためにまた子牛を産み、乳を出す。牛乳の寿命といわれる5、6年を精一杯生きている感じがした。

そのとき教えてもらったのが、牛乳は乳が出なくなると肉牛になるということだった。肥料や薬品にもなるという。悲しかったが、牛乳としての一生を全うして肉肉になったら、私たち人間がおいしく食べ、それをエネルギーにしていろんなことを頑張れば、牛の命を大切にしたいという気持ちになるのかなと思った。

また、乳を搾り続けられずに病気になった牛は年齢が若くても

★ ★  
常任委員長賞

## 命の重さと大切さ

駒込中学校  
2年生いけだ  
池田 さや  
紗也さん

みなさんにとって命とは何ですか?かけがえのないもの。一つしかないもの。一人一人が大切にしなければならないもの。色々な考えがあると思います。

そんな尊い命が簡単に奪われてしまうということはたくさんあると思います。世界には、私たちと同じように何も不自由がなく暮らしている人の他、私たちに比べて、地域の方とはとても大切なのだなと実感した。

そして、今最も大事なことは正しい情報を発信する「正しい情報を受け取る」ことではないだろうか。最初に書いた通り、最近では窃盗やコロナウイルスに便乗した詐欺が増えているようだ。こうした非常事態の時でも犯罪を犯してしまう人がいると知り悲しくなる。だから、こうした犯罪を減らすために「正しい情報の発信」をして特に高齢者が詐欺に合わないようにはしていくべきだと思う。区から詐欺や窃盗の注意メールが毎日来てはいるが、携帯を持たない高齢者も多いので、テレビやラジオはもちろん掲示や回覧板など出来る限り情報を発信していくべきだと思う。

今はコロナ一色の毎日でも私も自粛で一日中家で過ごしている。日本は外国の様にロックダウンはせずに「自粛要請」で強制ではない。

だがしかし、日本人はほとんどの人が自粛を守っている。都知事が3日に一度の買い物呼びかけただけで、買い物客が目に見えて減ったとテレビで見た。これは先に書いた日本の「教育」の効果の表れだと思う。買い物に限らず、一人一人が心がけることを多くの人が行うことで、こうして大きな力になる。これはコロナウイルスだけでなく社会から犯罪を減らすことにも通じる大事なことなのではないだろうか。

こうして「正しい情報を発信!」、「正しい情報を得て」、日頃からの「教育」を丁寧に、「地域」が丸となって立ち向かえば世の中を明るく変えていけるのではないかと。

と思います。そうすることによって人と人が助け合っ

て暮らしていける世の中をつくっていけるのではないかと考えました。

私は、学校で起こるいじめも誹謗中傷と同じだと思えます。例えばよくある陰口などです。直接相手に言うことができないからと言って陰で言うというのは直接相手に言うよりもひどいと思います。学校では、気が合う人ばかりと生活している訳ではありません。なので自分と意見が異なる人もたくさんいると思います。でも、自分とは違うことを理由に陰口を言うことによっていつのまにか相手

が傷ついてしまったり、自殺まで考えてしまうことだってあります。自分が悪気がなく言った言葉や、ってしまった態度のせいで相手がどう思うのかしっかり考える必要があると思うし、いじめも他人事は絶対ないので、一人一人が相手の事をよく考えるのと、思いやる気持ちを大切にしていけることが、もっとよい学校生活を送ることに繋がるとは思いませんか?考えた

見知らぬ人からのちよとした言葉。例え一言でも簡単に傷つく心。みなさんは人を傷つけるために酷い言葉を出しますか?それとも相手を励ましたり、支えるために優しい言葉をかけますか?言葉には相手を支える力があります。人を殺すために使うのではなく、お互いが頼り、頼られる関係を築くために人の心を支えることができる素敵な言葉を使ってみませんか?

★ ★  
優秀賞

## みんなを笑顔に

巢鴨小学校  
6年生いしだ  
石田 きり  
妃里さん

私は、「社会が明るくなる」とは「みんなが笑顔になっている」ということと同じだと思う。なぜそう思うのかというと、自分の少しの行動でみんなが笑顔になり、その場が明るくなったという経験をしたことがあるからだ。

その経験とは、私が小学5年の1学期のことだった。私はその日、遠出のために父と電車に乗っていた。その電車は、立っている人はいなかったが座席が2、3席空いているくらいの人で数だった。私と父は座席にすわり、席順は、左から父、私、そして若い女の人が私の右どなりに座っていた。父の左どなりは空いていた。乗ってから5分くらいたつと、駅で別の若い女の人が入ってきた。すると、私の右どなりにいた女の人の目の前に立った。どうやらその女の

人2人はこの駅で待ち合わせていたらしく、2人でおしゃべりをはじめていた。もちろんのこと、立っている女の人は座りたいのだと思う。そして、私がどけば、女の人は並んで座り、手前まで心ほこりできる。そこで私はとっさに席を立ち、「ここ座っていいですよ。」

と言って席をゆずり、父の左どなりの空いている席に座った。すると、「すみません。」という声が聞こえた。立っている女の人の声だった。そのく声、「ありがとうございます。」

という声が聞こえた。今度は座っていた女の人の声だった。私はそもそもお礼を言われるほど大きしたことではないなと思っていたので、言われたときはびっくりしたり、うれしくなってしまう。学校が再開され、またみんなでおおい給食を食べられる日まで、生きていてくれるだろう。

自分の命も人の命もみんな大切な命。すべての命を守ること、与えられた命に感謝しながら生きていくことの大切さを自宅で学び、6年生の1学期が始まった。

と小さな声で言った。すごくスッキリした気分になった。私が私に返ると、なんとなくその車両の人たちが私のことを見ている気がした。きっと小町の私が若い女の人の席をゆずったことにおどろいたのだろう。他の人にも認めてもらえた気がして少しほこらしかった。そして、その

## 言葉にするより行動する

西薬鴨中学校  
2年生かねたか  
金高 ふみか  
史香さん

小学生のころから、この社会を明るくする運動の作文コンクールに参加しています。このコンクールの時期がくると毎回、私は

「社会を明るくするために、自分は何が出来るのか?」と自分なりに考えます。今まで社会を明るくするために私は間違っていることをした人には注意することが正しいと思っていました。でも中学生になり、自分の考え方が変わってしまいました。

私は小学生のころから委員会の委員長などをやっていたこともあり、自分の考えを言葉にし相手に伝える事が得意でした。しかし、この世界にいる全員が自分の考えを伝えることができるとは限りません。反対に他人に自分のやっていることが間違っていると言われる、自分が良いと思ってやったことを否定されると、少しイラッとさせませんか。私はします。自分が努力して考えた結果にしたことを他人に口だけ

で否定されたら、「それなら、あなたがやれば?」と思ってしまいます。もちろん、社会やみんなと決めたルールを破った人がいたら、その人は言いわけをせずに謝るべきです。

私が考えたのは「だれかがポイ捨てをしていたら注意するのではなく、かわりに自分が捨ててあげる」という例です。人に話しかけにくい人でも言葉にするより行動する方が簡単にできるのではないのでしょうか。そして、このポイ捨ての例だと自分ごみを拾い、捨てている姿をだれか一人は見てくれるはず。もちろん何度も行動していても一人だけかもしれない。

私が考えたのは「だれかがポイ捨てをしていたら注意するのではなく、かわりに自分が捨ててあげる」という例です。人に話しかけにくい人でも言葉にするより行動する方が簡単にできるのではないのでしょうか。そして、このポイ捨ての例だと自分ごみを拾い、捨てている姿をだれか一人は見てくれるはず。もちろん何度も行動していても一人だけかもしれない。

またそれを見た人がまねをしてと続けば、その周りは多少明るい社会に近づくと思えます。少し前にも日本人がスポーツの試合会場に落ちているごみを拾い、それを見ていた人が世界に発信したというニュースがあり、私にも似た出来事がありました。

私が学校に通常の登校時間より早く登校した時にある先生が落ち葉はきをしていて、それを見た私が手伝っていること、登校してきた私の友人が「さすがだね。私も手伝うよ。」

と言ってくれたことです。とてもうれしかったです。そして、この言葉をたくさんの人が言ってくれ、落ち葉はきを楽しみ、終わらせることができました。

このように自分から動くことで周りの人を動かせる可能性があります。人に言われて行動するのではなく、自分で考えて行動したり、人を見て学んで行動したりする方が、自分や周りのモチベーションが上がるのではないのでしょうか。

私はこれから、この作文に書いたことがうそにならないよう、人と接する時は、口だけでなく行動にも表していきます。そして、この私の作文を読んでくれた人、一人でも学んで、自分から行動して、社会が少しでも明るく近づいてくれますようお願いしています。



★ ★  
優秀賞

## かぎられた命

朋有小学校 5年生  
みやもと 宮本 らいむ 来夢さん

命とは形では見えないものです。そしてだれもが大切に感じているでしょう。大切なものならずっとそのままにいてくれたらいいのと思います。でも悲しいことに命にはかぎりがあります。そのかぎりがいままでなのかも全く分かりません。ぼくは3つのことを取り上げて命について考えてみました。

まず1つ目はコロナウィルスです。このウィルスによって命を落とした人がたくさんいました。国内の死傷者数は9月17日現在1,473人にもおよびそうです。今でも油断はできない状況が続いています。ニュースを見ていると、命がけで立ち向かっているお医者さんや看護師さんの姿が映っていました。ぼくはこの時、自分の命をぎせいにしても動いている人たちがいることを知りました。そういった人たちのためにもぼくたちは感せん予防をしっかりと少しでも感せん者数をへらしていくことが大切だと思いました。どんな小さなことでもいいから、一人一人が意識して今できることをすればいいんだと思います。例えば、うがいや手洗いをすること、ソーシャルディスタンスを守ることです。大好きな学校が休校になってしまったのはとてもさみしかったけれど、命を守るためだから仕方ないのだと考えました。これ以上人の命がうばわれていくのはいやです。5月29日の空を見た人はいますか。医りょう機関への感謝の気持ちをこめてブルーインパルスが空を飛んでいました。ちょうどぼくの家の真上を飛んで行きました。すぐには力があつてかこよかったです。きっと医りょう機関の人たちにありがとうの気持ちがとどいてはいるはずですよ。ぼくも心からお礼を言いたいです。

2つ目は道徳の教科書で読んだ「命の詩」です。ぼくはこの詩の中で、命は電池みたいだと例えてひかかしているところがすごい発想力だと思いました。この詩を書いたのは小学4年生のみやこしゆきなさんという女の子です。電池はいつか切れるけど

取りかえればまた使える、でも命はいつかなくなるけど取りかえることができないと言っているのです。ゆきなさんがこのように感じたのはきっと生きたくても生きられない状況にあったからだだと思います。命をそ末にする人もいるけれど、生きたくても生きられない子がいることをもっと考えるべきだと思います。ゆきなさんの言葉からは、命の大切さが強く感じられました。ぼくも親からもらった命を大切にしながら今をせいーぱい生きていくことをこの詩から教えてもらいました。今の自分にできることを一生けん命やっっていくと思います。

そして3つ目はひいおばあちゃんがなくなった時です。はなれて住んでいたの遊びにいくと、とても喜んで待っていてくれました。足がいたくてもたくさん遊んでくれました。おそう式が終わって、四十九日が終わって、月日が流れても、ひいおばあちゃんはいませんでした。食事の時もいつもすわっていた席にいないし、テレビを見るときにすわっていたお決まりのざいすにもどこにもいませんでした。ひいおばあちゃんを電池で取りかえることができるならどんなにうれしいことでしょうか。2つ目話したように人の命は一度なくしたらどんな方法を使っても取りかえることはできないのです。ぼくはひいおばあちゃんの方も一生けん命生きようと思いました。91年間のかぎられた命でした。

「命あつての物種」ということわざがあるように、何事も命があつてこそできるということが分かったような気がします。ぼくが今ここにたっていることはすばらしいことだと感じるようにもなりました。自分の命はもちろん大切ですが、周りのみんなのことも大切にできる人間になりたいです。ぼくがこうして元気に登校できるのは命があるからです。毎日、怒ったり泣いたり笑ったりできることは幸せなことだと思います。一つしかない命を大切に、せいーぱい生きていこうと思います。

★ ★  
優秀賞

## 煌く明日の明るい社会のために

目白小学校 6年生  
かんのう 神農 りょう 凌さん

コロナ禍で毎日、暗いニュースが流れていけれど、僕は大切なことを学ぶことができました。

外出自粛の要請がでて、以前のようにスーパーに家族で行ったり、すきな「ポケモンセンター」などのお店に行ったりすることが困難になり、宅配便や宅急便などの宅配サービスを使って、ほしいものや生活必需品の多くを届けてもらうようになっていました。そんな中、ある日、宅配の人が物を届けてくれた時に、お母さんがその宅配の人にマスクを数枚渡しているのを見ました。今ではいつ手に入るかわからない、貴重なマスクをあげちゃうの？と思ってお母さんに聞いてみました。すると、お母さんは、「今は、お母さんたちはコロナにかからないように外出を自粛しているかわりに、宅配の人はずっと外に出て動いてくれているでしょ。けれど、宅配の人にコロナにかかってほしくない、大切な家族がいるかもしれない。危険をおかしてまで宅配をしてくれることへの感謝の気持ちなんだよ。」と言いました。これを聞いて、今まで外出自粛でつらいな、と思っていた自分がはずかしいと思いました。最近是不審者や、犯罪が少し多くなってしまったように感じるけれど、この、マスクで結がる「思いやり」と「感謝」の心こそが、暗かった社会を明るくすることができると感じました。なぜなら、マスクをもらった宅配の人が笑顔になったからです。

宅配の人や地域の人と関係を保ち、交流を深めることで、わずかに数枚のマスクでのつながりが大きくふくらんでいて、「地域」として犯罪や非行をおこしにくくすることができると思い、ほっとしました。これからも日々頑張ってくれている人に感謝し、自分のすんでいるまちを、よがあかるくたのしいまちにしていきたいです。

もう一つ、大切な事を学べた出来事がありました。最近、スーパーが「密」なので、お母さんが一人で買い物に行くことが多くなりました。そんなある日、お母さんがある出来事にてあいました。

誰がコロナに感染しているかわからない状況で、それでも生活を維持するためにスーパーに来る人たち。けれどあまりにも人数が多いため「一方通行」で規制をしてレジまでお母さんが並んでいた時、おじいさんが弁当の買い忘れに気づき、列をぬけたあと、元の位置に戻ろうとし

ましたが、戻れず、店員を呼びつけて怒鳴りちらしていたそうです。また禁止されているエスカレーターも勝手に使う人が現れると、次々とそちらに列をなす人がでてきたということもあったそうです。僕はこの話を聞いた時、とても複雑な気持ちになりました。なぜなら、気が張りつめているお客さんが列に戻れないことで怒鳴る気持ちが分かるけれど、みんなが密にならない様に一生懸命働く店員さんに一方的に意見をおしつけるのも、理不尽でおかしいと感じたからです。ここまで、「人」の話しかしなかったけれど、改めて「自分」を考えてみると、自業自得にもかかわらず、お母さんに八つ当たりしてしまったことがあります。しかし、お母さんはこんな話もしてくれました。

「ほぼ毎日、いろいろな人からクレームを言われ、対応するとともに、行列をなす人全ての会計をすませるレジの人。その人たちが守りたい人がいるかもしれないのに、みんなのために働いています。だからお母さんが、「毎日ありがとうございます。大変ですね。」と言ったら、レジのおばあさんは、なんと、「いえ、医療従事者の人の方が大変です。」と言ったのです。そのあと、道端で会っても会話をかわすことが多くなりました。僕はおばあさんの決しておごらず、常により大変な人がいることを考える、精神の大切さに気づくことができ、感動しました。

今まで話したことの共通点は、「相手をおもいやり、きちんと考えること」です。僕は日常の中でも「みんな」よりも「自分」を優先してしまうことがしばしばあります。けれど今回の出来事を通して、「自分」を優先したら、その分、「相手」を優先している人が必ずいるということが分かりました。

最近、ニュースを聞いていると、自殺をしようことや、相手を傷つけてしまうこと、わいろをあげてしまうことなどがありました。これらに共通していることは「自分が」苦しい、つらい、自分のために、という「自分」を優先する出来事で暗いイメージがあります。だから、僕は、「自分」を優先しようとする時、たまにでいから一歩ふみとどまって、「相手」を優先してみることで、社会を明るくすることに繋がると思っています。だから、僕もやってみようと思えました。小さな努力が大きな明るいものになると信じています。

★ ★  
優秀賞

## さくらねこ

駒込中学校 2年生  
ゆきおか 雪岡 ただよし 忠義さん

白いポメラニアンの子猫が家にいて、家族でそのポメラニアンを可愛がっている、僕は時々こういう夢を見る。目覚めて、夢だと確認した時のなんととも言えない寂しさは、しばらく余韻を残すほどである。小さいころから動物を飼うのが夢で、何度も両親に交渉したが、いずれも却下されて終わった。動物好きの僕にとって、ペット一匹も飼えない現状は、非常に残念なもので、その思いがしばしば夢を見させるのかもしれない。

ペットを飼えない分、動物の存在に敏感になっているのか、周りの動物が目につくようになった。僕の住むマンションの周りには、常連の野良猫が何匹かいるが、そのうちの茶色の猫の耳が少し変わっている事に気がついた。なんと、V字形に切り込みが入っているのだ。はじめは、怪我をしてしまったのか、もしくは病気のなかつたかと思ったが、調べてみると、「繁殖できないように手術を受けている証」だということがわかった。耳が花びらの様な形にカットされていることから、このような猫を「さくらねこ」と呼ぶらしい。ではなぜ、「繁殖できないように手術を受ける」のだろうか。

日本では、年間約35,000匹もの猫が行政により殺処分されていて、その多くが生後間もない子猫だそうだ。

そもそも、なぜ、殺処分をしなければならぬのか詳しく調べてみると、次のようなことが分かった。

犬の場合は、「狂犬病予防法」により、飼い主のいない野良犬は行政機関が捕獲しなければならないが、猫を捕獲しなければならないという法律はない。ただ、一般市民が「拾った」「保護した」として持ちこんだ場合は引き取り義務がある。また、飼い主のいる場合でも、「動物愛護法」により、飼い主から引き取りを求められた場合には引き取らなければならない。

こうして引き取った犬や猫がどんどん増えてしまうと、税金で養いつけるのが難しくなるため、やむをえず殺処分するしかなくなるというのだ。そして、持ち込まれる猫の多くは、野良猫が産み落とした子猫のため、殺処分されるのは子猫が多くなっている、ということのようだ。このような悲劇をなくし、殺処分ゼロ

を実現するために、公益財団法人「どうぶつ基金」という団体が、野良猫を捕獲し不妊手術を施し元に戻すという活動をしているという。それが、「さくらねこ」と呼ばれる猫の実態だったのだ。

さて、野良猫が産み落とした子猫にとどまらず、行政に持ち込まれる犬や猫の中には、「赤ちゃん」の頃は可愛いと思って飼ったが、成長するにつれて思ったのと違った」という実にも身勝手な理由で飼主に持ち込まれるというケースも多々あるという。そもそも、野良猫も元をたどれば、飼猫だったものが捨てられて繁殖を繰り返しているケースがほとんどかもしれない。つまり、殺処分は人間の身勝手さが招いたと言っても過言ではない。

人間は他の動物をペットとして可愛がる一方で、人間よりも命の価値の軽い種族として捉えがちである。僕は、動物とはいえ自ら喜んで迎えた一つの命を手放すのに、どんな理由があるというのか不思議でならない。もちろん、突然やむを得ない事情を抱えてしまう人もあるとは思いますが「思っていたのと違った」「増えすぎた」の様な信じがたい理由で簡単に捨てる人が飼主になる資格はないと思う。人間が知力や体力において優れているならば、全ての命を大切にできるよ、知恵を使うべきである。ただ、僕自身も夢にまで見るほどつい簡単に「可愛い、欲しい」と思ったことは否定できない。いまいちど、動物を飼うことを真剣に考え、更に、本当に動物を可愛がり動物好きだと言えるのはどうということなのか考えてみた。

考えた結果、今の僕にできる動物を本当に思うことは、ペットとして飼って可愛がることではなく、まずは殺処分ゼロを実現させるために協力する事だと思った。そして、さっそく「どうぶつ基金」について調べ、お小遣いの中から少額ではあるけれど、活動への寄付をした。猫の不妊手術には、それこそ人間の身勝手だという意見もあるようで、それも否定はできないが、それでも生まれた命がこれ以上残酷な形で消されないようにするための今できる最善策ではないだろうか？

今夜はさくらねこの夢を見ようである。

★ ★  
優秀賞

## たった一つしかない命

駒込中学校 2年生  
おおかわ さな 紗奈さん

命、それは誰もがたった一つしかもっていないかけがえのない大切なもの。

私は、今までそこまで深く命の重さについて考えたことがありませんでした。しかし、最近ニュースでよく見る黒人差別や道徳の授業で学び考えるようになりました。

まず、1つ目は人間関係です。私は、一度相手の気持ちを考えずに言ってしまったたった一言で相手を傷つけてしまったことがあるからです。その後、考えてみて自分が言われたら嫌な気持ちになるので謝り解決できました。そんな経験をしたとき、言葉の重みが分かったような気がしました。軽く言ったつもりでも相手を傷つけてしまうことがあると知った時から、言う前に必ず一度口には出さずに、相手の気持ちを考えてから言うようにしています。こんな小さな出来事でも、命の問題に関係してることがあるのです。

また、私は実際に体験したことがあります。友達から

「いつも笑顔だから、悩み事とか無さそうだよ。」

と、言われたことがあります。その一言を言われた時に、悲しくなりました。どんな人でも悩みが無い人なんていないと思います。自分にはたくさん悩んでいることがあるのに、と思えました。自殺とまではいかなくとも心にグサッと刺さりました。人間関係で何回も悩んできたことがあるけど、救われたこともあります。「大丈夫？いつでも相談してね。」

と、優しく寄り添ってくれた、その言葉だけで気持ちが楽になりました。なので、私はたった一言で嬉しい気持ちや幸せな気持ちになる反面、悲しい気持ちや嫌な気持ちになることもあったと分かりました。これからは、その一言

で相手がどんな気持ちになるかを考えてみてください。

2つ目は、SNSとの関わり方です。今はSNSがあるのが当たり前、SNSで色んな人と繋がるのも当たり前の様な時代になっています。便利で楽しいものでもありますが、誹謗中傷によって追い詰められて自殺することも増加しているのです。

私は、スマホを持っていない時は仲間はずれにされないか心配していたことがありますが、でも、実際はそんなことはなかったけど、持っていることに少し安心しています。

また、友達とメールのやり取りをしているときに、誤解を生んでしまったことがあります。何も怒っていないのに、怒っていると勘違いされたことがあり、そのときにお互いに見えていないからこんなことが起こるのだと思えました。そこで、相手の表情や動作どれほど大切なのかを実感しました。

3つ目は、一日一日を大切にすることです。私たちは、当たり前のよう一日を過ごしていますが、そうではない人もたくさんいます。健康で何も不自由なく過ごすことができていることに感謝しなくてはいけないのです。急に病気になる、今までの暮らしがなくなってしまふこともあります。だから、いつ何が起つても良いように毎日悔いのない充実した日々を過ごしていこうと思います。

今まで、命についてあまり考えることがなかったが、これからは生き方を見直していきたいです。また、最近ではコロナウィルスにより亡くなった方も大勢いるので、死は身近にあると学びました。死を望んでいなかったのに生きられなかった人達の方も私は、命を大切に過ごしていこうと思います。